

五期俳句会第百六十七回七月七日

七夕である。久貝さんはこの日がお誕生日だったので、シヨルダーバッグを書道、句会からプレゼントする。

しかし彼女は、書道の手本を書くのが精いっぱいと言いついて俳句は、出句もなしで帰ってしまう。

ほおずき

鬼灯の実に千代紙の晴れ衣

今井由紀子

夏空を映す池には錦鯉

松浦武子

水茄子のやわき齒ごたえほろあまく

塩田豆子

入梅や軒の雫のゆったりと

今井由紀子

ドライブ疲れ惚け茅花が首を振る

浅香さとみ

草叢に笹百合すつくと際立ちて

松浦武子

なだらかな坂叩き降る梅雨強し

塩田豆子

逝きし友早や幾年や星涼し

今井由紀子

願うても叶わぬことや笹祭り

今井由紀子

初蝉の声聞く朝や寺の苑

塩田豆子

紫陽花や老人ホームの灯の静か

今井由紀子

水無月や孫の礼状三行のみ

浅香さとみ

緑陰の石に腰掛け深呼吸

松浦武子

寺の庭池に映りし半夏生

松浦武子

楚々と咲き刹那に落つる沙羅白し

塩田豆子

半夏生には季語として二つあり、一つは夏至から十一日目のこと、もう一つ植物で葉が半分白くなる水辺のものがある。

勿論前後の言葉で区別できるが、やっぱり家にいるだけでは、なかなか作句出来ない。句を読んだだけで景色が浮かぶ様な句や想像が広がるものを、と日々努力しているつもりでも難しい。

句会が済んだ翌日から、もう来月の事を考えている毎日です。